

—  
学  
園  
遍  
歷  
(山梨七年)  
—

渡  
辺  
美  
知  
夫

—

## 学 園 遍 歴 (山梨七年)

渡 辺 美 知 夫

甲府の宿は旧兵舎の片隅であった。全国の連隊所在地に必ず見られた、あの百米突もあろうかという、長方形の建物である。二階建て、東西に延びた建物内部は、中央を廊下が走り、その西側に十畳ほどの部屋が仕切られている。建物の二箇所南北に抜ける通路があり、その片隅にそれぞれ二階に昇る階段がついていた。私共に当てがわれたのは建物の西の端で、南側の二区画が真新しい檜材で、畳敷の二部屋にしつらえられていた。そのうちに一戸建に移って貰う筈だという口約束はあったが、その口約束は遂に果されなかった。建物の東端の部分は学生達の寮になっていたが、中間の部分は暫くは空いたままだった。その後数年のうちに、私共の並びの部分に倫理の先生と工学部の電気科の助教授の家族などが入ったが、お互い殆んど没交渉であった。

私はここを根城に、水田や畑の畦道あぜみち伝いに、山梨大

学芸学部に通った。十分ぐらいの道のりであったが、夜間部もあったので昼夜をおかず往復した。甲府のダウンタウンは、終戦間際の爆撃で焼き払われていたの、恋人達はもとより、中年若年の夫婦たちも、畑の土手に腰かけて、夜の一刻ひとときを過していたもののように、偶々そこを通りかからねばならぬ身は、なんとも気兼ねだったが、何となく敗戦直後の解放感のようなものが窺うかがわれた。

学生達の力は、国立大学とは云っても、地方ではこの位のものなのかと思わせられる程度であったが、私は旅順に赴任する前に、大伯父から受けたアドバイスを守って、講義はもとより、演習という名の講読にも、能う限りの準備をした。とは云っても参考文献は、旅順を引揚げる際、持ち帰ることを禁じられていたの、実は難渋した。引揚げ当時私は、敗戦日本では大変な就職難に違いない、従って田舎の中学あたりに職

が見付ければ仕合わせ位いに考えていたので、ライブラリーはもう持たない積りでいたところが、引揚げてみると日本は、文化国家とやらになっていて、各県に「大学」ができた上、その一つに自分も採用される仕儀になって、アテが見事にはずれた。従って私は月に一度は東京に出て、本探しをした。家内は甚だ迷惑したと、今以て折ある毎にこぼして見せる。

さて買こんだ本を、兵舎の片隅の何処に置くかも問題である。二、三センチもありそうな、部厚い、御立派な棚を数段吊ってくれたはよいが、暫くすると湿気が、棚板から書物に吸い上げられ始めたのには閉口した。

大学の本格的な講義というものは、実は私にはこの時が初めてだったので、性根を打ちこんだ積りである。やがて英語英文学の学生の外に、音楽や経済や理科の学生までが加わり、学芸学部建物とは幹線道路を隔てた向う側の、工学部の学生の幾人かまでが集まって来ることになり、彼等の一部は兵舎の「わが家」にも屯ろして、たった二部屋のうちの一部屋は、殆んど彼等に占領される有様になった。旅順時代とそっくりの現象である。こういう現象が起つた原因は、新しく始

められた「マイスター制度」というのにあつたように思う。この制度は旅順で「副保証人」と云つていた制度に似ている。学生は全教官の中から、学部、学科の別を超えて、マイスターと称する相談役を、自由に決めてよいということになつていたのである。旅順のとき同様、学生達は刻を分たず居据つた。家内は自ずからその対応を迫られることになる。私も自然の成り行きで、学校にいる時以外はわが家に来ている学生たちと、互いの想いを述べあうことになった。つい最近家族中が集まつた席で息子に

「あの頃は窮屈で大変だつたらう」と悩つたところ

「お蔭で親爺が何を考へているかが、襖ふすまごしによく判つたよ」と云われ、成程なと思つたことであつた。

学生達は甲府に実家のある者も勿論いたが、中央線や身延線の沿線から出て来ている者もあつて、春夏の休暇あとなど、柚子や、秋の終りには渋抜きをした柿などが到来するのが、私にはほのぼのと情が籠つて懐しかった。後に東京に出ると、それがショートケーキの類に一変して、更めて甲府を偲んだことであつた。

あるクリスマス前の夕方、彼等が何処で手にいれたか、生きた雄鶏を一羽提げて現われ、料理してくれと

云った。私も家内も素よりその任でないと断わると、彼等は一とき途方に暮れていたようだが、やがて兵舎の裏に出て、数人がかりでモタモタした揚句、漸くなんとかなったらしく、あとは家内が委されて、結局夕食が十時を過ぎることになったのは、已むを得ぬ仕儀であった。私はむかし学生時代に聞いた話を思い出していた。東京大のI先生と京大の古典語のT先生、それに東北大のD先生が、学生時代同宿された時期があつて、その時やはり生きた鶏の始末に困られ、鶏の首に長い縄をつけて、裏庭の対角線上から、T先生とI先生が力ませに引張られのを、D先生は二階の窓からそつと覗き見してらしたといふのである。

又ある歳末の夕方、いつものように賑やかに語り合つてゐると、俄かに半鐘が鳴り出した。どうやら火元は下町の方らしいといふので、みんな一斉に駆け出して行つてしまった。この日はこれでお仕舞だろうと、後片付けを済ましたところへ、連中一同そつくり引返して来て、そのまま歳を越したこともある。

どうもこの頃はみんなが何となく人恋しくて、これからどういう了簡でくらしについていたらよいものか、暗中模索の日々だったのかもしれない。

そうした中から、やがてリーダー格が現われた。経済専攻のA君である。これはずつと後になって打明けられたことだが、A君は母子家庭に育ち、しかもその母親との仲がうまく行かず、今風に云えば非行寸前の状態だったのが、兵舎の片隅に通うようになって、漸く心機一転したのだそう、彼は現在は東京のさる私鉄の重役を定年退職したばかりという御身分なのだが、年に一、二度は決まって「一升瓶」をさげてわが家に来て来ることになっている。

「私は山梨大学ではなくて、渡辺塾の卒業生です」といふのが、彼の口癖である。その上彼は職権を利用して(？)、年に一度は同窓を語らつて大きなホテルで、昔懐しい歓談の一席を設けてくれる。しかし私にとつてこの成り行きは全くの偶然なので、私がA君に取り立てて何かをしたといふ覚えは全くない。人間関係にはこういう機微もあるのだなと思わせられている。

A君はやがて同人誌を出したいと云い出した。私にとつてこれは珍しいことではない。旅順にも霞浦にも多賀にも、こういう雑誌はあつて、私もいつも何か書かされたものだが、A君には特に、出版費用を自分も負担しようと申出たものだ。大学からは独立した、正

真正銘の同人誌らしかったからである。ところが彼は言下に私の申出を断わった。いろんな店に広告を出して貰って、その広告代で十分費用が賄まかなえると云うのである。私にはそんな才覚はないので大層感心した。だからこの時のことを、特別ハッキリ覚えていたのである。その同人誌の名前はたしか LA VARIÉTÉ とか何とか言ったと思う。

彼は又日曜とか祭日とかいうと、友達数人を語らつて、私を連れ出しては甲州のそちこちへハイキングを試みさせた。昇仙峽はもとよりのこと、甲府の周辺の山に登ったり、森に分け入ったりするのだった。街の北方の要害山とか云うのに登ってみると、頂上が平地になっていて、その一隅に「信玄公初湯の井戸」という立札があった。偉い人は生まれた時から大層高いところで湯浴みをしたものなのだ、と感じ入ったものであった。彼等は時にはわざと私を行き止まりのヤマの中へ連れこんで、林道を何本も行きつ戻りつさせたこともある。私はお蔭で日帰りハイキングのベテランになったものだ。

そのうちに前記の同人誌に対抗するかのようになり、もう一つ機関誌が出るようになった。それにも私は何か

寄稿した筈だが、そちらには必ず英文科の主任教授で、後に学部長になられたH先生が巻頭文をお書きになり、英文学科の学生がいろいろ発表した。私もこちらには英文学関係のエッセイを書くようにした。この頃に私はハテナと思ひ当るべきであったのだが、A君が主宰した方には英文科生の寄稿は大変少なく、もう一方は英文科専用であった。それにもう一つ予兆というべきことがあった。わが家に集まって来る連中の中に、英文科の学生はゼロではなかったが、極端に少なかつたのだ。くだいようだが当時私は、そんなことに気を廻している暇いとまはなかつた。後に東京に出てから気付いたのだが、英文科の学生はH教授の意向を憚はばかって、私に近付かないようにしていたに違いない。彼等は地元山梨のどこかに就職する積もりであつたらうから、H教授に睨にらまれては、都合が悪かつたであらう。

それでは何に気付くべきであつたかと云えば、つまりH先生が私をうとましく思つておられたということである。先生は御自身のお気持を、あらわにはお示しにならず、私の方は外にいろいろ言い付かることなどがあつて、迂闊にもそれとは気付かなかつたのだ。H先生は山梨師範時代からの古参教授で、山梨県全域の

英語教育界の重鎮であられたわけで、そこへ何処の馬の骨とも判らぬ私が跳び込んで来たわけだから、いい気持がしなかったのは無理もない。そういえば学長のAさんがしきりに私の来任をせまっていた頃、只一度私は山梨大学を、「下検分」がてら訪れたことがあったが、私を接見されたH教授は、教室用の机や椅子の積み上げられた、物置のような部屋へ私を招き入れ、立ったまま初対面の挨拶をして下さった。お前にはここに椅子はないぞという暗示を、私は正面から、シカと感じとるべきだったのかも知れないが、青二才の私にはそういう気の廻し方は心得がなかった。学芸学部には私より二年後輩のK君もいたのだが、彼からも何の忠告もなかった。彼はその後山梨大学を勤め上げ、勲三等瑞宝章を貰い、信州の引退先で亡くなった。

私にはそういう地元の雰囲気を嗅ぎとるいとまもないほど、ノルマの講義のほかに色々と仕事があった。むかし旅順で学生主事としてやっていたような雑役である。例えば学長は自分の述べる式辞の原稿は、全て私に任せた。文部官僚としての生活が長かったらしい人としては、至極当り前のことだったのかも知れないが、私としては、初めのうち異様な感じがしたもので

ある。甲府では学長にNHKが講演を依頼してくることもあって、その草稿書きもやはり私の仕事であった。放送の際は私も放送局に同行し、原稿の読み方について打合せを十分した上、放送室の背後に立つて、数十分間の立合いまでした。後には私自身が「社会時評」という番組の受持の一人になって、正味十三分間の一席を、甲府を去るまで勤めもした。当時はまだテレビは発達していなくて、専らラジオ放送であった。テレビといえば昭和三十年代の末頃か、私は甲府の下町の電器屋さんで、初めてテレビの相撲放送を見てから病みつきになり、街の北の端の兵舎から、下町の電器屋さんまで、バスで通うまでになった。そのうちに店の主人が私のためにリング箱を並べた上に、椅子まで置いてくれるようになり、以来私は今日に至るまで、テレビ相撲のファンであり続けている。

学内の雑用に充分せわしい思いをしている私に、やがて県下のあちこちから、一席弁じてほしいという話が来るようになった。農村の婦人会からが殊に多かったように記憶する。壮中年婦人の、意識改革に乗り出そうとする意気ごみが感じられた。

ある夏休み中の一夕、物の考え方についてかねて思

い続けていたことを、小一時間述べたあと、外にてで一息いれていると、一人初老の男の人が近寄ってきて

「先生は一体何が専門ですか」と訊く。私は

「いやあ、私はなにもセンモンですよ」と返答した。

相手は重ねて反問もせずに立去った。多分私のまづい冗談が通じなかつたのであろう。一介の英語教師と思つている人間が、哲学者まがいの話をしたので、気になつたのかもしれない。

又その頃始められるようになった、一月十五日の成人式にも呼ばれることがあつた。今思い出すのは「牧——何とかいう町の成人式のことである。着飾つた新人たち数十名を挟んで、町のお歴々が並んでいらつしやる。私は若者たちに向つて

「あなた方の成人を祝つて、来賓の方々が大勢見えているようだが、あの方々の眼には、あなた方の顔が投票用紙に見えているのかもしれないだよね」と言つてしまつた。それをどうしてか今も忘れない。

そんなある日、呼ばれて学長室に行つてみると、時の呉知事のAさんが見えていた。なんでも樽拾いから身を起こした、立志伝中の人物と聞いていた。堂々たる恰幅の偉丈夫であつた。そのAさんが学長のAさん

に

「学長、あんたは不思議なひとですな」と言い掛けている。

「平生あなたと話しをしていると、随分乱暴な言葉遣いをなさるのだが、一旦入学式とか卒業式とか、改まつた席で式辞を読む段になると、俄かにおとなしく、言葉遣いも穏やかになつて、人が変わるんですよ」。

学長は私の方を向いてニヤリとした。学長は私を楯に自分の喧嘩早く、ミリタリストイックな性格を、カモフラージュしようとしていたのかも知れない。この傾向は私には戦前旅順で学生主事になる前から、すでにボンヤリとながら判つていた。私はその頃学長室で「学長の言葉遣いの中から、汚いことを拾い集めたら、結構卑語辞典が一冊出来ますね」と冷かしたことがあつたのだ。軍国主義<sup>たげな</sup>時代の、学長が調子に乗つて暴走しないよう、やんわりと水を差してやろうという思いが、私の心にずっと<sup>ひそ</sup>潜んでいたのだ。しかし当時の教授陣や学生たちは、そこまでは察して呉れなかつた。彼等は私が時の風潮にかぶれて、日頃のリベラルな態度を豹変させたと執つたようである。これもあとになって思い當つたことなのだが、私が学生

主事になった途端に、学生がパタリと家に来なくなり、客は事務関係の者ばかりになったものだ。当時私は自分が教職から事務職に変わったためだと単純に考えていたが、実は裏があつたのだと悟るには随分ひまが要つた。

つまり此処で、私の言つて置きたいことは、私として、少なくとも主観的には、戦前も戦後も、リベラリスト（これが旅順の学生達が私に貼つたレッテルである）としての私の生き方に、何の変化もなかつたということである。その筋が一本通つていと認めて下さつたのでなければ、私が学生時代一年余計の四年間、私淑もし導いても頂いたS先生が、再三甲府に足を運ばれて、私をT女子大に移して下さつた筈がないと思つている。

私が自分の非力を補うためにも思つて努力したことの一つは、私の尊敬する先生方を甲府に来て頂いて、学生たちに直接その警咳けいがいに接して貰うことであつた。手初めにお願ひしたのは東北大のD教授であつた。先生は私が卒業論文のテーマに拵んで、大層苦勞したWalter Paterの、深くすぐれた研究者でもあられたからである。ろくろくお礼も差上げられなかつたのに、

勿論先生は何も仰言おっしゃらなかつた。題目は「何処へ連れて行かれるか」ということで、何を言ひ出されるのかと思つたが、要はH. G. Wellsの好意的再評価であつた。学生たちはもつと新しい作家の話が聞けるかと思つたのにと、不服そつであつた。もうお一人はS先生である。先生は大学だけでなく、甲府一高でまでお話をして下さつた。出来たてのYMの集會にも出て下さつたのは勿論のことである。先生はこの時は奥様もお連れ下さり、お二人で湯村という温泉の、天皇も泊りになつたというホテルに泊つて頂いた。これにはチョットいきさつがあつた。私は少し前牛込の先生のお宅に伺つたとき、奥さまから

「主人は私に子供ばかり生ませて、何処へも連れて行つて呉れないですよ」というセリフにびっくりさせられていたのだ。更にもうお一人は吉田首相に煙たがられたという、T大総長もなかつたN先生である。この場合は私も学生数名と共に、たしか下落合にあつた先生のお宅に押しかけて、甲府御来訪をお願いした。先生がその場で承知して下さつたのにびっくりもし、感激もしたことであつた。先生はこの時市の公会堂で一般市民のためにも講演をして下さつたが、大入り満



員、人いきれでムンムンする状況であった。勿論先生は大学のYMの集まりにも出て下さり、気さくな態度で学生の相手にもなり、讚美歌も一緒に歌って下さった。歌う方はお得意でないことも、ちつともお隠しにならなかった。これもクリスチャンとしての仲間意識の現われであったのだろうと思っている。

先程から出来たてのYMという句を繰り返しているが、私が甲府で努力した、もう一つが宗教活動であった。着任早々の私のところへお向いの工学部の学生が来て、学Yつまり山梨大学YMCAを作ってくれと言った。私が驚いてどうして今迄YMがなかったのと尋ねると、彼曰く、工学部は元々宗教色が希薄な上に、師範系は国粹主義でしたからね、ということである。私は旅順に赴任して間もなくの、昭和十年の正月に受洗した身で、学生町だということで若い身空で旅順教会の長老というものにされて、引揚げまで熱心に勤めた積りであり、勿論学Yの一員でもあったものの、YMを作るなどという経験はなかった。そこで東京本郷追分にあったT大YMの知恵を借りることにした。すると早速Tさんという学生が、明治学院大の友人と一緒に甲府に来て呉れて、なんとか山梨大YMの形ができ

た。メンバーは意外なくらい急速に膨らんでいった。Tさんとは未だに御縁が続いている。私はこれを縁に講義の方でも、旧約、新約、経外典の歴史などを話してみようになった。中でも福音書問題には格別興味をそそられた。そのうちに今度は下町の真中で開業している歯医者さんが見えて、甲府の市にもYMを作りたいということで、私はこの話にも乗って、歯医者さんを中心に体制作りをした。東京のYM本部から派遣されて来た人と、昨年までは時候の挨拶を続けていたが、今年はそれが途切れた。お互い齢ですなという思いである。

そうした雰囲気の中である夏、昇仙峡の奥の宿で合宿をやろうという学生の動議が出て、私も同調し、出掛けて行って熱心な討議を重ねているところへ、先一言触れた倫理学の先生が現われ、私が徒党を組んでいると、聖書を引用して非難攻撃した。日蓮上人のように偉くなくても「法難」はあるものなんだなと、この時知った。

そんなこんなで私はいささか疲れを覚えるようになった。甲府に来て七年、この辺が潮どきかと思うようになった。そこで意を決して学長室に行き

「もうこの辺で辞めませんか」と水を向けてみた。

「まだ少し仕残しがある」と仰言る。

「それではお先に」と云う訳で、私は甲府を去ることにした。S先生の勧めで、私はその前年T女子大に、非常勤講師として週一日早起きをして講義に通い、女子学生の手応えをすずに味わっていた。

丁度この頃同窓会があつて、転進の知らせに都合が良いと思ひ、出席してみた。そこに私の旅順での初任給から、電報一本で「大金」を鮮やかに掠めとつた、九州のY君も来合せていて、私が転任のことを告げると

「へええ、もう早々と御隠退か」と云う。私は驚いた。私はこれからだと思ひ込んでゐるのに、この男は隠退かと云う。俺とは考えの筋がまるで違ふな、と更めて思わせられた。彼はその後九州の母校で、教務部長を勤め上げ、勲二等とやらを貰つて翌年亡くなつたそう。功成り名遂げたと御満悦で逝つたことであらう。

私にとって山梨大学最後の教授会で、私は教授になつた。今迄ずっと助教だったのだ。私は昇任のお礼言上とお暇乞いに学部長室に行つた。

「ポツダム教授だね」

これがH教授の最後の餞けの只一言であつた。

(二〇〇一・一・二六)

前稿に私が意識的に書くのを控えた事項が二つある。しかし今はもう時効にかかつてゐるわけだから、兎も角も記録しておこう。

(一) 私の山梨大学着任早々、H教授のお宅に伺つたとき、教授は私に四周が真黒に焼け焦げた一かたまりの書物を取出して見せて、二、三年前にお宅が全焼した際「蔵書がこんな姿になつたよ」と仰言つた。「本というものは全部燃えることはないものだね」ということである。つまり今のお宅は建て直されたものだとこと、火事の原因は先の奥様が放火なされたのだという。何も知らない私になんでいなりそんな変事を語られたのか、未だに私には判らない。

(二) ある年の学生の一人が提出して来た卒業論文を讀んでみると、日本人の英文らしくない流暢な文体である。私は勘でこれは怪しいと思つた。そこで心当りの文献を、あれこれ当ってみると、割合簡単に元の英文評論が見付かつた。丸写しであつた。これでは及第

させる訳には行かない。ところが後になって卒業者のリストを見ると、その男の名前が載っているではないか。私はここで一騒動起こすべきだったのかもしれないが、H教授が学部長の権限(?)で、手を廻したことは明らかだったので、私は沈黙を守った。その学生は最近甲府の周辺の、さる中学の校長を勤め上げて、芽出度く勇退したという趣旨の添え書きのある年賀状を寄越した。

私の心境は複雑である。

それにつけてもう一つ思い出したことがある。私の在任中休み毎に、高校や中学の先生方が対象の講習会があった。格上げとやらが目的だという。会期は一区切りが十日か二週間位だったと思う。テキストを選んで購読をするのだが、受講生は、「当てないでくれ」と言ってきた。仕方がない、私は独演した。講習の終りにテキストをすることになっていたが、そのうちに筆記試験でなく、レポートにして呉れという注文である。やれやれと思ったがそれも認めた。「お礼にお昼のお弁当はこちらで用意します」と云うのは断わった。さてある夏のこと、差出されたレポートの中に、何処かで読んだことのある一篇が出て来た。心当りを調べた

らD教授の大著からの抜き書きであった。此度は私は端的に単位を与えないことにした。数ヶ月後大学の私の部屋へ訪ねて来た者がある。

「この夏先生の講習を受けた者ですが、単位認定の通知が未だに届きません。どうなっているんでしょうか」ということである。私は壁際の戸棚の抽斗を探した。幸いそこから「D論攷の写し」そのものが出て来た。赤鉛筆で勢よく×印が引かれている。私は客にそれを見せて、本人のものであることを確認した上、

「こんなに有名な本を写すなんて、僕も見縊られたものだ」と言った。彼は答えた

「私の下手な文章を書いて出すより、名文を写した方がよいと思ひまして」

勿論私はこの際は譲歩しなかった。

私は人間の、そして人類の、最後の課題は倫理だと思っている。

私は先に私の敬愛する先生方に、甲府に来て頂いたことを話したが、最初のD先生のときは別として、その後の諸先生方については、一切の接待を引受けようと言った下さった方があったのだ。下町の真中に屋敷を構えておられた、旧家の当主T氏である。実はT氏

にMさんというお嬢さんがあって、そのお嬢さんの中學時代から英語のレッスンを引受けていたのだ。そのMさんは幼い頃小児麻痺に罹り、両脚が不自由であった。御両親が彼女の将来について、大層心痛しておられ、ある時父君から私に「あの子は幸い頭は悪くなさそうだから、出来るだけ学問をさせたい。就いては一つ面倒を見てやって呉れまいか」という、思い詰めた表情の頼み込みがあったのだ。「私に出来ることと云えば英語のレッスン位しかないが」と言う、「兎に角そこから始めてほしい」ということになり、私は街の西端の「兵舎」から、下町の中央まで週一回、自転車を通うことになった。私も嫌いな仕事ではないから、打込んで相手をした。彼女は私以上に熱心で、いくらやっても止めてと言わないので、ついつい夜更けまで頑張ったものだ。私はくたびれて、ゆるい上り坂を帰りの自転車漕げなくなる程であった。そんな訳でT氏は私に負い目を感じて下さっていたものと見える。お陰で私は諸先生に、まともな接待をすることが出来たのである。

その後のことも序でに記しておこう。

彼女は山梨大学附属小学校から山梨英和に進み、さ

てそこから先をどうするかと、私は意見を求められた。この頃はすでに東京に移っていたが、丁度S先生がT女子大の学長を退かれたあと、国際基督教大学(ICU)に移っておられたので、先生にも話を通した上、「ICU」はどうですかということになった。

そこで私が彼女に強く勧めたのが、車の運転である。「こんな軀からだで」と彼女は怯ひるんだが、「そんな軀だからこそやるんだ」と私は言った。父君は早速特注の車を造らせなされたらしい。

ICU入試試験の面接(これがこの大学の特色と聞いている)で、私と読んだ作品のことが次々に話題になったと、後で聞いたが、彼女はこの大学の四年間を見事な成績で過ごし、「右総代」で卒業した。それから更に上智大の修士課程に入り、そこでM神父に出会うことになる。もう一人折りしも中世英文学の大家が、東北大学から移って来られたので「やれやれ俺の役目も終りだな」と、私はホッとしたものだが、その教授は不幸にも、その後間もなく急逝されて、私は痛嘆した。彼女は上智大の課程を了えると、今度はカナダへ留学することになった。M神父の斡旋あつせんで、確か Queen's University と言った、カナダ最古という名門の大学で

二年間を過ごした。この間彼女はカナダやアメリカの友の輪を抜けることができ、且カナダの社会の傷害者に対する温かい接し方に、深く感銘したようである。日本に戻って、わが国の人々の傷害者に対する冷淡さを轟々と感じるにつけ

「これをカルチャーショックと云うのでしょね」と寂しそふであった。カナダの人情の暖かさは、パツク旅行の先々で、傷害者でない私にも、身に沁みて感じられたことである。帰国後彼女は上智短大の講師となり、今日に及んでゐる。間もなく定年になるそうである。更めて歳月の移ろいを感じる。

父君は数年前に亡くなられ、私も四谷のイグナチオ教会での追悼式に参列したが、御母堂は百歳を越えて尚御健在である。

もう一つ記しておかねばならぬことがある。彼女の修道院入りの件である。何時のことであつたか、彼女が教職に就いて間もなくの頃であつたと思う。ある日突然彼女一人が車を駆つて、調布深大寺のわが家に現われた。甲府の街を出離れた最初の経験だということであつた。事情を聞いてみると、跡をとつた御長男、つまり彼女の兄、殊にその嫁との仲がうまく行かない

と云う。兄嫁には「どうせあなたは私共のお荷物だ」といったことを言われるのだそうである。

「身の置き処がないから修道院に入る積り」という。実は私の家の近所にも立派な修道院があつて、時を告げる鐘の音をしょつ中聞き、グレーの制服に身を包んだ修道女たちも折々見かけてはいたし、敬虔に似た気持も懐いてはいたが、さて彼女がその仲間入りをしたとなると、私は思わず反対せざるを得なかつた。修道院内部のことなど何の知識もなかつたが、其処もまた浮世のつづきという気がして、直ちには賛成しかねた。しかし彼女は余程思い詰めていたのである、私の意向に抗して、グレーの制服をまとつてしまつた。

入つたのは私の近所の修道院ではなかつたが、時折り車を駆つて私のもとにも訪ねて来た。初め数年間は彼女の素養を尊重してくれる院長さんで、気分も良かったらしいが、代が替わると部屋が一階から三階に移されて雰囲気ガラリと変わり、不自由な軀で昇り降りが大変な苦行だといふすようになり、やがて「僧職」を離脱したいと言ひ出し、遂に「還俗」した。教職の傍ら英米の詩や散文の翻訳に身を入れたし、訳著も次々に出版されるようになった。余生はこの一筋に繫

がるつもりらしい。

私の後見役は実質的には疾っくのむかしに終わっているのだが、形式的にはまだ続いていて、最近伴侶を失った私の娘が、今度は彼女の世話になり始めている。縁は異なるものである。

富士登山のことも書き残しておきたい。

甲府では朝夕富士を仰ぎ見て暮らすことになる。私は着任早々の教室で

「君たちは甲州生まれの甲州育ちだろうから、富士山には当然登ったことがあるのだろうね」と訊いてみた。ところがその返答は

「まだ登ったことがありません」であった。私は事の意外に驚いた。そのこともあって私はその年の夏休みにも、早速富士山に登ってみることにした。私にとって初の体験である。

私が勧めたわけでも唆<sup>そそ</sup>かした訳でもないのに学生が二十人ほども尾いてきた。

私共は吉田口から登った。なんでも大型のトラックに立ったまま詰めこまれて、未舗装の道路をかなりの距離走り、砂埃にまみれた覚えがある。何処から何処まで運ばれたものか、今では一向思い出せないが、今

と違つて終戦直後は、富士登山も結構不便だったのだ。

五合目あたりまでは比較的楽に登れたので、高度を増すにつれて喬木が減り、灌<sup>かん</sup>水<sup>すい</sup>から草地になつてゆく様子が興味深かったが、そこを出はずれた辺りから一人の女子学生が高山病の兆候を呈し始め、これでは頂上を目指すのは無理ということになつて、外ならぬ私が彼女を背負つて、元来た途を引返すことになり、かなり降つて彼女の呼吸が正常にかえつた処で、漸く負うた子から解放されることになった。私はそこであらためて頂上を目指して登り直したわけである。

この道中で私が驚かされたことがもう一つある。

富士登山は今も一部の人間にとつては宗教行事である。菅笠に手甲脚絆、草鞋<sup>かぢ</sup>ばき、「六根清浄」を唱えながら、団体で登ってくる。私は傍に来た女子学生に「あなたはあ、いう人達をどう思う」と聞いてみた。その答えは

「お気の毒に思います」であった。「あの人は私より遙かに遅れている」という意味と私は解した。これでは私とは全く受取り方が違う。私はショックを受けた。

往つたり来たりで草臥れたので、八合目で宿をとつ

て、頂上は翌朝目指すつもりには私はなっていた。ところが後から来た学生たちが私を宿から引張り出したものだから、期せずして夜通し登山ということになった。私は疲労困憊、一足毎に「五体倒地」という有様になった。

富士山は要するに火山灰の集積である。西行風に下から見上げてゐる分には秀麗清楚、まことに結構な眺めであるが、親しく土足にかけて見ると、何とも面白くない山だなと、私は思った。一度は登ってみた方がよいが、それ以上は遠慮してよいと、この時以来私は思っている。

女子学生ついでにもう一つ早い頃の経験談を加えよう。

私は男女共学ということをも山梨大学で初めて経験したのだが、ある日一人の女子学生に聞いてみた。

「共学になった感想は」これに対する彼女の返答も私には意外であった。

「男つてこの程度のものかと思わせられます」

(二二〇〇一・一一・二三)